３　　訪問の合図　　　　　　　　　　　　　　　文法　用言③　形容詞・形容動詞

読解　比喩の示すものをつかむ

新傾向　複数資料の内容を正確に把握する

は、㋐年ごろあるの女房のもとへ通はれけるが、あるとき、おはしたりけるに、その女房のもとへⓐやんごとなき女房①につてやや久しう物語しふ。もⓑはるかに更けゆくまでに、客人帰り給はず。②忠度にしばしやすらひて、扇をⓒ荒く使はれければ、宮腹の女房、「③野もせにすだく虫のよ」とに㋑やさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。そののち、またおはしたりけるに、宮腹の女房、「さても、なにとて扇をば使ひやみしぞや」と問はれければ、「いさ、ⓓかしかましなんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。

* 語注

薩摩守忠度＝薩摩国の国司である平忠度。平安時代末期の武将・歌人。

宮腹の女房＝皇女の子である女房。

野もせにすだく虫の音よ＝「かしかまし野もせにすだく虫の音よ我だにものをいはでこそおもへ」の和歌の一部。歌意は、「やかましいことだ。野原せましと集まって鳴く虫の音よ。私でさえもじっとあなたのことを思っているのに」。

【原文】

薩摩守忠度は、年ごろある宮腹の女房のもとへ通はれけるが、あるとき、おはしたりけるに、その女房のもとへやんごとなき女房客人に来つてやや久しう物語し給ふ。小夜もはるかに更けゆくまでに、客人帰り給はず。忠度軒端にしばしやすらひて、扇を荒く使はれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫の音よ」と優にやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。そののち、またおはしたりけるに、宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇をば使ひやみしぞや」と問はれければ、「いさ、かしかましなんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

〔　　　　　　　　　　〕が〔　　　　〕と話している間、忠度は〔　　　　〕で過ごし、〔　　　〕を荒々しく使っていた。女房は和歌の一節を〔　　　　　　　　〕、それを聞いた忠度は帰った。後日、女房は〔　　　〕を使うのをやめた理由を尋ねた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋑は終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓓの活用の種類と活用形を答えよ。〈２点×４〉

ⓐ〔　　　　　〕活用〔　　　　　〕形　　ⓑ〔　　　　　〕活用〔　　　　　〕形

ⓒ〔　　　　　〕活用〔　　　　　〕形　　ⓓ〔　　　　　〕活用〔　　　　　〕形

問四　チェック問題［用言③　形容詞・形容動詞］

　次の活用表を完成させよ。〈１点×４〉

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 漫々たり | | きよらなり | | いみじ | | なし | | 基本形 |
|  | |  | |  | |  | | 語幹 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 未然形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 連用形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 終止形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 連体形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 已然形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 命令形 |
|  | |  | |  | |  | | 活用の種類 |

問五　傍線部①について、

（1）　含まれている音便の種類をすべて答えよ。〈２点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

（2）　現代語訳せよ。〈５点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②での忠度の説明として最も適当なものを選べ。〈５点〉

ア　客人が深夜になっても帰らないことを、じれったく思っている。

イ　大切な客人に気を遣わせないように、何気ないふりをしている。

ウ　虫の多さに不快感が募り、思わず乱暴な行動をとっている。

エ　帰らない客人へのいらだちが、虫の鳴き声で少し和らいでいる。

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、宮腹の女房は何を「虫の音」にたとえたのか。十五字以内で答えよ。〈７点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容と合致するものを一つ選べ。〈７点〉

ア　忠度は、客人と長話をしていながら、自分が帰ったことをとがめようとする宮腹の女房に不快感を覚えている。

イ　忠度は、宮腹の女房の歌の意を理解して帰ったのに、その理由をわざわざ尋ねてくる女房の真意を測りかねている。

ウ　忠度は、答えの明らかなことを尋ねる宮腹の女房に、わざとはぐらかす言葉を返して風流な戯れを楽しんでいる。

エ　忠度は、客人の帰りを待てずに立ち去ったことを、宮腹の女房がふと口ずさんだ歌を利用して弁解している。

〔　　　〕

問九　次の【資料】は兼好法師が書いた『徒然草』の一節である。本文と【資料】を比較した【読書会】での会話のうち、適当でないものを一つ選べ。〈４点〉

【資料】

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく帰るべし。久しく居たる、いとむつかし。

人とむかひたれば、多く、身もくたびれ、心もならず、の事りて時を移す、互ひのため益なし。いとはしげに言はんもわろし。心づきなき事あらん折は、なかなか、そのよしをも言ひてん。同じ心にむかはまほしく思はん人の、つれづれにて、「いましばし。今日は心閑に」など言はんは、この限りにはあらざるべし。

が青き、誰もあるべきことなり。

（注）　阮籍＝中国、の国の人。竹林七賢の一人。人を喜び迎えるときには青い瞳になり、気に入らないときには白い瞳になったという。

【読書会】

ア　生徒Ａ―兼好と忠度は気が合うこともありそうだね。本文でお客が帰るのをずっと待っている忠度は、兼好のように「用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく帰るべし」と思っていたかもね。

イ　生徒Ｂ―そうだね。本文で忠度は長話をすると心身が疲れることを、それとなく宮腹の女房に伝えようとしていたんだろうね。忠度は長話を、【資料】でいうところの「互ひのため益なし」と考えていたんじゃないかな。

ウ　生徒Ｃ―でも、気が進まないお客には「そのよしをも言ひてん」と、直接言うべきだと考えている兼好に対して、それとなく忠度へ何かを伝えようとした宮腹の女房は風流で素敵だと思うよ。

エ　生徒Ｄ―風流と言えば、本文は「野もせにすだく」と和歌の一節を引用して思いを伝えているし、【資料】でも「阮籍が青き眼」と漢籍から言葉を引用しているから、登場人物や作者の教養の深さもうかがえるね。

〔　　　〕

【解答】

問一　宮腹の女房／客人／軒端／扇／口ずさみ／扇

問二　㋐＝長年・数年来　㋑＝優美だ・上品だ〈４点×２〉

問三　ⓐ＝ク活用・連体形　ⓑ＝ナリ活用・連用形

　　　ⓒ＝ク活用・連用形　ⓓ＝シク活用・終止形〈２点×４〉

問四　〈１点×４〉

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 漫々たり | | きよらなり | | いみじ | | なし | | 基本形 |
| 漫々 | | きよら | | いみ | | な | | 語幹 |
|  | （たら） |  | なら | じから | （じく） | から | （く） | 未然形 |
| と | たり | に | なり | じかり | じく | かり | く | 連用形 |
|  | たり |  | なり | ○ | じ | ○ | し | 終止形 |
|  | たる |  | なる | じかる | じき | かる | き | 連体形 |
|  | （たれ） |  | なれ | ○ | じけれ | ○ | けれ | 已然形 |
|  | （たれ） |  | （なれ） | じかれ | ○ | かれ | ○ | 命令形 |
| タリ活用 | | ナリ活用 | | シク活用 | | ク活用 | | 活用の種類 |

問五　⑴＝促音便・ウ音便〈２点〉

　　　⑵＝客人としてやって来てかなり長くお話しになる。〈５点〉

問六　ア〈５点〉

問七　忠度が荒々しく使う扇の音。（13字）〈７点〉

問八　ウ〈７点〉

問九　イ〈４点〉

【現代語訳】

薩摩守忠度は、数年来ある宮腹の女房のもとへお通いになったが、ある時、（薩摩守（忠度）がその女房のもとに）いらっしゃった時に、その女房のもとへ高貴な女房が客人としてやって来てかなり長くお話しになる。夜もかなり更けていくまでもずっと、客人はお帰りにならない。忠度は軒先にしばらくとどまって、扇を荒々しくお使いになったところ、宮腹の女房は、「野原せましと集まって鳴く虫の音よ」と上品に優雅に口ずさみなさるので、薩摩守はすぐに扇を使うのをやめてお帰りになった。その後、また（薩摩守（忠度）が女房のもとに）いらっしゃった時に、　　　　　　　　　　　　　 　　宮腹の女房が、「ところで先日、どうして扇を使うのをやめたのか」とお尋ねになったところ、「さあ、やかましいなどと聞こえましたので、そういうことで（扇を）使うのをやめました」と　　　　　　 　（薩摩守（忠度）は）おっしゃった。

【資料】現代語訳

　たいした用事がなくて人のもとへ行くのは、よくないことである。用事があって（人のもとへ）行ったとしても、その用事が終わったならば、すぐに帰るのがよい。長く居続けるのは、たいへんよくない。

　人と向かい合うと、（話す）言葉も多く、体も疲れ、心も穏やかでなくなり、万事に支障をきたして時間が（無駄に）過ぎ、互いのために利益がない。嫌そうに（会いたくないと）言うのもよくない。（他人と会うことに）気に入らないことがあるようなときは、かえって、その理由を言ってしまおう。同じ心で向きあいたいと思うような人が、特にすることがなく、「今しばらく（話しましょう）。今日は心静かに」などと言うようなのは、この限りではないだろう。

　阮籍の青い瞳は、誰にもあるはずのことである。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり」（４～５行目）を現代語訳せよ。

問２　「なにとて扇をば使ひやみしぞや」（５～６行目）における「し」を文法的に説明せよ。また、本文中に同じ助動詞が異なる活用形で用いられているが、その活用形を答えよ。

【補充問題解答】

問１　薩摩守はすぐに扇を使うのをやめてお帰りになった

問２　過去の助動詞「き」の連体形・已然形